



須恵器平瓶 奈良時代 長7.5cm  
天平古材

# 川瀬敏郎

花人

古いものも新しいものも、もうそんなにほしいものがあるわけではないのです。とくに立派なものは、だんだんうつつとうしく感じるようになりました。人のつくるものだから、どこかに「ほめてほしい」という心根が見えてしまう。たとえば運慶仏のようなものは、ながく見ていたいとは思いません。

花もじつさいにいてみると、名花珍花よりも、なんでもない平凡な草のほうがよいことが多い。名花珍花はやはりなにかを主張するためのものなので、その「我」を消すことがむつかしいのです。

近代の表現は、問いも答えもその「我」にあります。それにむきあうのはもうしんどい。いつばう歳月が消しさつてくれるのか、古いものにはそれが無いものがある、ありがたいと思います。いまの私にとって、無心に見ていられるものが美しいものです。

自然のように大いなるものに、ひれふすことと立ちむかうこと。本来そのふたつの行為のあわいに生れたのが、人間による造形であって、私たちはその絶対的な「小ささ」を、いとおしく感じるのかもしれない。この板は天平の古材です。須恵器とおなじ店で買いました。別々に置いてあったのですが、なんとなく、ふたつがあうような気がしました。

主役は板です。須恵器はそこに埋もれているかのように、あるいはそこから生れたかのように一体化していて、とりあわせということでもありません。花もここに来る途中の道端でとつたもので、いけたということもなく、そこに水がたまり、小さな命が宿された、そういうものと思っています。



Toshirou Kawase